じ膳を食する「食い別れ」の儀礼にも使われている。葬送におけるさまざまな儀礼的行為は、死者を弔い霊魂を鎮めるために行われると同時に、その過程において死者と遺族との関係、および親族関係や近隣関係をあらためて確認し、補強する機能を担っている。たとえば葬式の準備段階では、一切を親族や近隣の人にまかせてしまい、遺族は特定の役割以外には手を出さないことも、その一例としてあげることができる。

また一方で、位牌持ちなど血縁者が中心になって行う儀礼の場面では、逆に故人との血縁関係がより強調される傾向にあり、志摩地方の葬送儀礼ではそうした場面がとくに顕著であるといえる。堅子の事例では、炮烙を使った野の飯炊きは故人の娘が担当し、飯炊きに使う水は跡取りの嫁が井戸に汲みに行くこと、また出棺の際に行う食い別れの儀礼を、位牌持ちの跡取りと棺持ち２人の三役が行うこと、埋葬後に跡取りが墓を踏みしめること、埋葬からの帰途で水持ちの嫁と飯持ちの娘が乞食の物まねをすることなどは、そうした一例である。

このような儀礼は、単に死者と血縁者との関係を確認するためだけのものではなく、言わばそのような儀礼を通して、その家の継承者が誰であるかなどを他者に知らしめる意味があり、数々の儀礼を手順どおりにおこない、所定の配列に葬列を組んで野辺おくりを行うことを通して、血縁者も村の人々も家の継承を再確認し、そのことを認証するといえる。むしろ、血縁者を中心としたさまざまな儀礼も、その告知対象としての地縁的共同体の存在無しには、このように顕著に強調されないと考える。

このような意味にたって、浄土近世墓地で確認された、血縁者が行う儀礼に伴う葬礼道具が17世紀後半に出現するという現象の意味を問うと、当該期になって周辺地域において近世的な地縁社会が完成し、先に述べたような地縁的共同体に対する血縁原理の告知儀礼が必要となったことを意味していると考えられる。また、浄土近世墓地の被葬者一家は一族墓を営みつつも、当時完成しつつあった近世的地域共同体に関わりをもっていたことをも示すと言えよう。

以上の想定を堅子・千賀墓地に残された石造物から再確認する。堅子地域の葬送は宝珠寺を中心として展開している。享保の本末証文に見られるとおり、近世に入り江戸幕府の宗教統制のもとに位置づけられた宝珠寺は、周辺地域の布教により臨済宗南禅寺派の寺院として村の檀那寺となっていった。享保３年（1718）以降、各寺の本末関係が整理され当地における各寺院の関係が明確になり、固定化されてゆくことがうかがえる。このことから、堅子村では18世紀はじめ頃に本格的な寺院の再編が成り、村の先祖供養に関わっていったと考えられる。この動きを示す大きな基点が、墓地内に設けられた六地蔵菩薩像（享保５年銘）の造立時期であるといえるだろう。この六地蔵菩薩は、石造品調査の章でも触れたとおり、現世と冥界の境界を表し、銘文にも「三界萬霊有縁／無縁各各霊位」「村中」などが刻まれ亡者の安らかなる供養の実現を願うための石造品である。この六地蔵菩薩・棺台は村民の共有財産であり、村墓に入る全ての村民が平等に使用する物である。言い換えるならば、当石造品が出現することは村民が共同で墓地利用を行うようになったことを示し、村民総意による葬送地の認識がなされた証しであると言える。

堅子地区、千賀地区ではいずれも18世紀前半から墓標の著しい増加傾向が見られる。これは先に指摘した村墓の整備と連動する現象であると考えられ、村民を中心とした檀那寺と墓地施設の整備が墓地造営、葬送儀礼参加階層の低層化・均質化を招いたものと理解できよう。この点については18世紀初頭以降、相対的に低階層の戒名である「信士」「信女」号を持つ墓標が増加することからも推定できる。

以上のように16世紀末～17世紀初頭に当地域において出現した近世村落は、17世紀後半には強固な地縁的共同体を顕現させ、18世紀初頭には村墓を出現させる。こういった近世村落形成のプロセスは、当地域のみならず西日本一帯で起こった近世村落の変化を体現したものであったと言えよう。

4　浄土近世墓地をとりまく流通・交通について

第Ⅵ章では、享保11年（1726）に作成された浄土近世墓地周辺村落の「差出帳」にみえる舟の種類が

的矢・畔蛸・相差では、漁船が主体となっているのに対して、堅子・千賀では商売船・田畑肥取船のみが記載されていること、また相差でみられる「いさば船」は鳥羽で漁獲された魚や産物を伊勢河崎・津・名古屋・熱田へ運ぶ船であったといわれていることを指摘した。

これは的矢村が安乗・畔蛸両村海域を除く的矢湾内および伊雑浦において、ボラ、コノシロなどの漁業権を占有していたため、堅子・千賀では商売舟を遠く紀州まで出して、交易により生計を立てざるを得なかったことに起因する。慶応２年（1866）５月に、堅子村の商売舟（200石積）が尾州知多郡常滑村沖で海難事故にあった時の経緯が記録された史料には、船が紀州熊野引本浦（現三重県紀北町海山区引本浦）から松材木を積んで、尾州鳴海湊へ運び商売を終えた後、空船の状態で常滑沖へ向かい、そこで大時化に遭遇し船が沈没したことが記されている。交易ルートとして紀州熊野から尾洲鳴海、そして常滑へのルートが想定できる。

このことは、志摩国答志郡小浜村（現鳥羽市小浜町）に残る安政２年（1855）の「諸廻船改控帳」でも同様の傾向が読み取れる。この記録によれば、同年12月から翌年３月の４ケ月間に小浜港に入津した船73艘のうち常滑の船が18艘と最も多く、内海船が５艘、他に大野・横須賀など知多半島の船が多数を占めている。そして、その出港地は江戸が16艘、名古屋が11艘、四日市が６艘、大坂が６艘、兵庫が３艘の順で、堅子村の商売船と同じように引本浦より杉丸太を運んでいた船もみられる。また先に第Ⅵ章でみた相差墓地に残る海難者供養碑の中に、紀伊国比井浦や讃岐国小豆島、豊前国中津の人のものがみられるのは、志摩地域が近畿から東海そして関東へと続く海上輸送の結節点であったことを示すものである。

このような志摩地域の地域性は浄土近世墓地で出土した多数の炮烙からも読み取れる。今回出土した炮烙は南伊勢系、尾張系（おそらく尾張産と考えられる）、そして大阪湾岸に多く見られる畿内系のものである。これら他地域の炮烙が一遺跡でまとまって見つかったことは、伊勢湾をめぐる流通を考える上で非常に興味深い。そこで、三重県内における炮烙の出土事例から志摩地域の特質を抽出してみる。管見に触れた範囲で現在のところ三重県内では73遺跡において炮烙が出土している。出土している炮烙は、もっともポピュラーなものとしてａ南伊勢系鍋の系譜を引く薄手で口縁部を外反させた後端部を引き上げるタイプ、ｂ内耳鍋の系譜を引く内湾する口縁部と内耳を持つタイプ、ｃ羽釜の系譜を引く鍔つきの形態を持つ瓦質のもの、ｄその他産地不明であるが、在地産であると考えられるものがある。ａは南伊勢系のものとして捉えられ、ｂについては東海地方のもの（おそらく尾張が大半を占める）と考えられる。なお、東海系のものについては中世に遡る鍋についても分布図に落とした。ｃは瓦質のものが大半を占める。ｄは伊賀地域に分布の中心を置く、やや厚手で口縁部を外反させるものと、中伊勢地域に分布の中心を置くものとがある。

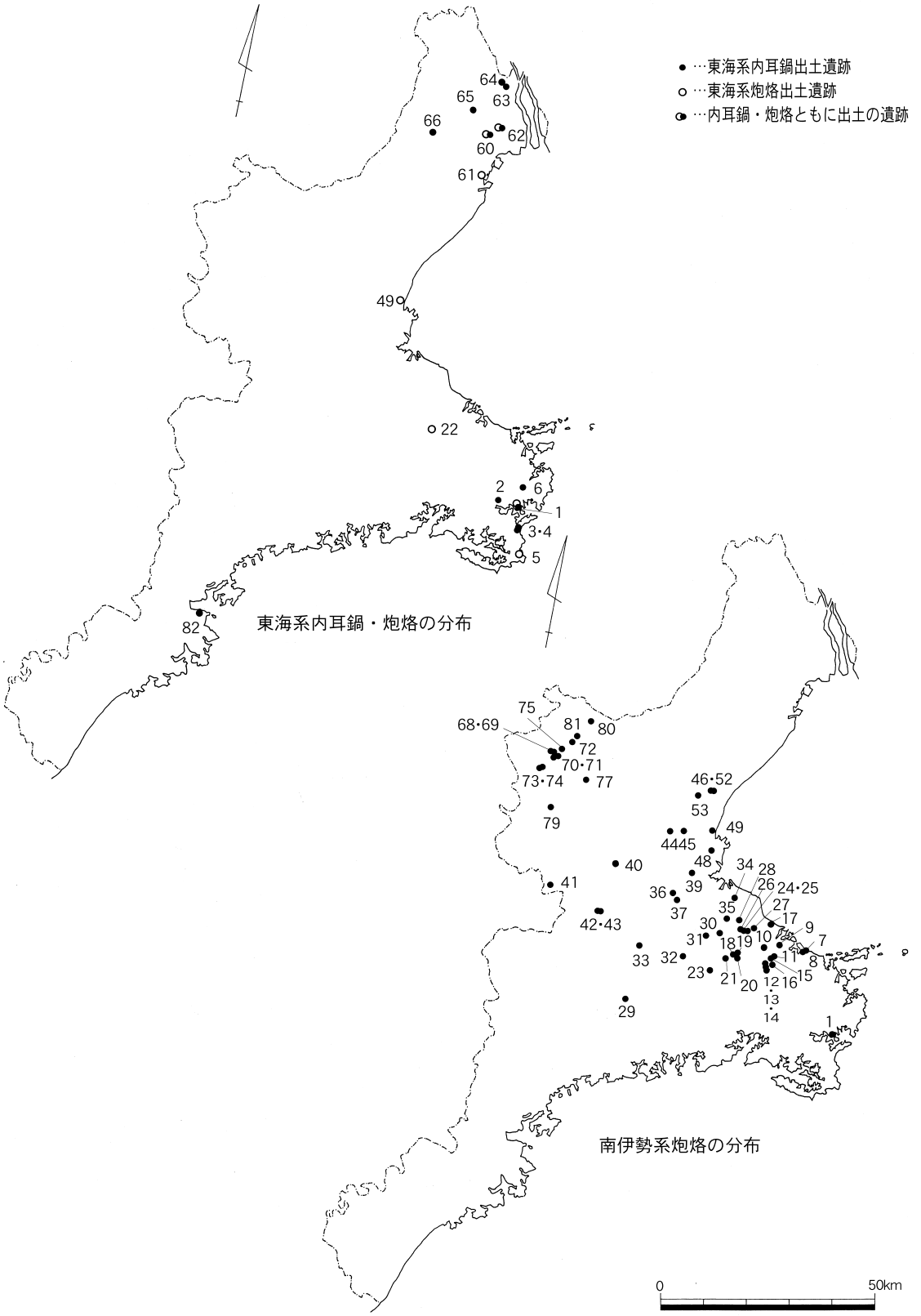
まず、東海系炮烙の分布であるが、地理的に尾張と近接する北伊勢地域での出土が目立つ。中・南伊勢地域にも１遺跡づつ見られるが、志摩地域に２遺跡出土しているのが特徴的である。この傾向は内耳鍋では更に顕著で、北伊勢地域と志摩地域に２極化した出土状況を示す。また、尾鷲でも１例見られる点は興味深い（第67図上）。

次に南伊勢系炮烙の分布であるが、やはり南伊勢地域から伊賀地域まで広く分布する。しかし志摩地域での出土は浄土近世墓地のみで、非常に希薄である。近世遺跡の調査事例の少なさに起因する可能性もあり、今後の調査に注意が必要である（第67図下）。

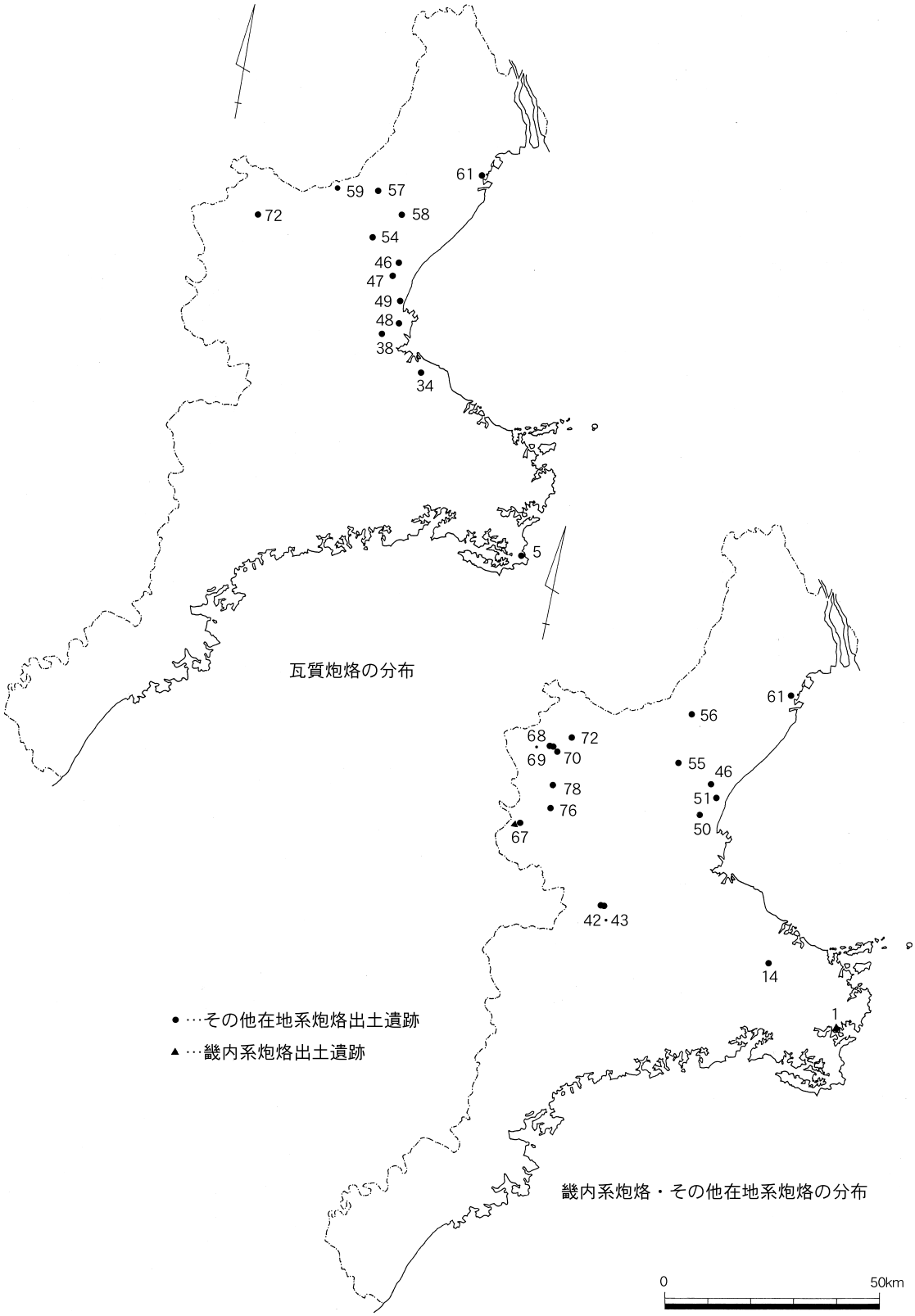
羽釜の系譜を引く瓦質のものは中～北伊勢地域に分布する。南伊勢系炮烙とは北部地域で競合しない分布を示すが、分布の中心である中伊勢地域では南伊勢系と分布域がラップし、排他的関係にあったものではないことがわかる（第68図上）。

その他在地系のものについては資料の実見を含めさらなる検討が必要で、現段階では詳細な検討ができない。畿内系のものは浄土近世墓地以外では、名張藤堂家邸跡で大和のものと類似する形態のものが出土しているのみである（第68図下）。

以上が三重県内における炮烙及び内耳鍋の分布状況であるが、この分布図から看取しうる志摩地域の特徴として、東海系炮烙の分布が目立つ点がまず挙



第67図　東海系内耳鍋及び炮烙・南伊勢系炮烙分布図



第68図　瓦質炮烙・畿内系炮烙及びその他在地系炮烙分布図

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
1	浄土近世墓地	志摩市磯部町的矢字浄土	
2	待岡中世墓	志摩市磯辺町上之郷字別所	1
3	西殿遺跡	志摩市阿児町国府	2
4	東海道遺跡	志摩市阿児町国府字東海道・一色	3
6	松尾前田遺跡	鳥羽市松尾町字前田	5
60	伊坂城跡	四日市市伊坂町	59
62	桑部城跡	桑名市大字桑部字城下	62
63	南小山廃寺	桑名市多度町小山中ノ谷	63
64	多度B遺跡	桑名市多度町西城・下川原・梅塚	80
65	山田城跡	員弁郡東員町山田字山城	81
66	大久保遺跡	三重郡菰野町潤田字大久保	81
82	向井遺跡	尾鷲市向井町向井	81

第60表　東海系内耳鍋出土遺跡一覧表

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
1	浄土近世墓地	志摩市磯部町的矢字浄土	
5	真名井神社裏包含地	志摩市大王町名田	4
22	田丸城跡	度会郡玉城町田丸	18
49	安濃津遺跡	津市柳山津興字松村	48
60	伊坂城跡	四日市市伊坂町	59
61	四日市代官所跡	四日市市北町2-23	60
62	桑部城跡	桑名市大字桑部字城下	61

第61表　東海系炮烙出土遺跡一覧表

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
5	真名井神社裏包含地	志摩市大王町名田	4
34	川島遺跡	松阪市川島町・東久保町	31
38	筋違遺跡	松阪市嬉野新屋庄町字筋違	37
46	六大B遺跡	津市大里窪田町字出口	45
47	森山東遺跡	津市渋見町、河見町宮の前	46
48	嶋抜遺跡	津市雲出島貫町字町中ほか	47
49	安濃津遺跡	津市柳山津興字松村	48
54	大石遺跡	安芸郡芸濃町椋本	53
57	糀屋垣内遺跡	亀山市羽若町字糀屋垣内	56
58	東樺野遺跡	亀山市菅内町上野	57
59	市場遺跡	亀山市関町加太市場	58
61	四日市代官所跡	四日市市北町2-23	60
72	法華堂西館跡	伊賀市佐那具町字法華堂871-1ほか	71

第62表　瓦質炮烙出土遺跡一覧表

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
13	亀谷郡C遺跡	伊勢市前山町字亀谷郡	11
42	多気北畠氏遺跡（世古地区）	一志郡美杉村下多気	40
43	多気遺跡群（村上地区）	一志郡美杉村下多気字上村	42
46	六大B遺跡	津市大里窪田町字出口	45
50	里前遺跡	津市野田字里前	49
51	上津部田城址	津市一身田上津部田	50
55	下川遺跡	安芸郡芸濃町雲林院字下川	54
56	伊勢亀山城	亀山市本丸町外	55
61	四日市代官所跡	四日市市北町2-23	60
67	名張藤堂家邸跡	名張市丸之内54-3	64
68	上野城跡（崇廣堂武場跡・武家屋敷跡）	伊賀市上野丸之内78	65
69	国史跡旧崇廣堂	伊賀市上野丸之内78-1	67
70	上野城下町遺跡（野崎新平下屋敷跡）	伊賀市上野田端町918-11	68
72	法華堂西館跡	伊賀市佐那具町字法華堂871-1ほか	71
76	比土遺跡	伊賀市比土字東賀柳	74
78	下郡遺跡	伊賀市下郡	76

第63表　その他在地系炮烙出土遺跡一覧表

南伊勢系炮烙

遺跡No.	遺跡名	所在地	文献No.
1	浄土近世墓地	志摩市磯部町的矢字浄土	
7	荘遺跡	度会郡二見町荘	6
8	安養寺跡	度会郡二見町溝口・山田原	7
9	里中遺跡	度会郡御薗村長屋字里中	8
10	離宮院跡	度会郡小俣町元町ほか	9
11	隠岡遺跡	伊勢市倭町字隠岡	10
12	井戸谷遺跡	伊勢市前山町字井戸谷	11
13	亀谷郡C遺跡	伊勢市前山町字亀谷郡	11
14	中起遺跡	伊勢市勢田町字中起	11
15	河原谷遺跡	伊勢市前山町字河原谷	11
16	古市・中之地蔵町遺跡	伊勢市中之町・桜木町	12
17	有滝道遺跡	伊勢市村松町字有滝道・藤治垣内	13
18	野篠里中遺跡	度会郡玉城町野篠	14
19	波瀬B遺跡	度会郡玉城町下田辺	15
20	楠ノ木遺跡	度会郡玉城町勝田字楠ノ木ほか	16
21	山神城跡	度会郡玉城町積良字浦ノ内	17
23	麻加江城	度会郡度会町奥屋敷	19
24	外山遺跡	多気郡明和町蓑村	20
25	本郷遺跡	多気郡明和町蓑村	20
26	発シA遺跡	多気郡明和町有爾中字発シ・高田	21
27	明星地区内遺跡群	多気郡明和町大字明星地区	22
28	斎宮跡	多気郡明和町斎宮・竹川	23・24・25
29	東前遺跡	多気郡大台町菅合字川合	26
30	河田古墳群	多気郡多気町河田字東谷	27
31	巣護遺跡	多気郡多気町大字相可字巣護	28
32	若宮遺跡	多気郡勢和村丹生	29
33	粥見小林遺跡	松坂市飯南町粥見字小林	30
34	川島遺跡	松阪市川島町・東久保町	31・32
35	櫛田地区内遺跡群（池ノ端地区・奥ノ垣地区）	松阪市櫛田町池ノ端・字奥ノ垣内	33・34
36	藪ノ下遺跡	松阪市岩内町字藪の下	35
37	堂ノ後遺跡	松阪市深長町堂ノ後	36
39	田村西瀬古遺跡	松坂市嬉野田村町字西瀬古	38
40	家野遺跡	一志郡白山町家城字家野	20
41	南遺跡	一志郡美杉村太郎生	39
42	多気北畠氏遺跡（小田地区）	一志郡美杉村下多気	40
43	多気遺跡群（法光寺調査区・村上地区）	一志郡美杉村下多気字土井沖・字村上	41・42
44	森南田遺跡	久居市森町南田	43
45	戸木城址	久居市戸木町	44
46	六大B遺跡	津市大里窪田町字出口	45
48	嶋抜遺跡	津市雲出島貫町字町中ほか	47
49	安濃津遺跡	津市柳山津興字松村	48
52	安養院跡	津市大里窪田町	51
53	山添遺跡	安芸郡安濃町大字清水字山添・林崎	52
68	上野城跡（崇廣堂武場跡・武家屋敷跡）	伊賀市上野丸之内78	65
69	国史跡旧崇廣堂	伊賀市上野丸之内78-6・78-1	66・67
70	上野城下町遺跡（野崎新平下屋敷跡）	伊賀市上野田端町918-11	68
71	上野城下町遺跡（入交家・土蔵）	伊賀市上野相生町2828	69・70
72	法華堂西館跡	伊賀市佐那具町字法華堂871-1ほか	71
73	木津氏館跡	伊賀市大野木	72
74	神ノ木館跡	伊賀市大野木	72
75	蓮花寺跡推定遺跡	伊賀市服部町中ノ坊	73
77	和田遺跡	伊賀市喰代和田	75
79	浮田遺跡	伊賀市上神戸	77
80	菊永氏城跡	伊賀市上友田字向山ほか	78
81	恒岡氏城跡	伊賀市円徳院	79

畿内系炮烙

1	浄土近世墓地	志摩市磯部町的矢字浄土	
67	名張藤堂家邸跡	名張市丸之内54-3	64

第64表　南伊勢系及び畿内系炮烙出土遺跡一覧表

文献No.	報告書名	副題	発行年	発行機関
1	三重県の中世墓		1992	三重県埋蔵文化財センター
2	西殿遺跡発掘調査報告	一般地方道安乗港線道路特殊改良事業に伴う	1992	三重県埋蔵文化財センター
3	東海道遺跡発掘調査報告	磯部大王自転車道整備事業に伴う	1989	三重県教育委員会
4	真名井神社裏包含地発掘調査報告		2003	三重県埋蔵文化財センター
5	松尾前田遺跡発掘調査報告	平成12年度(主)鳥羽磯部線緊急地方道路整備事業にかかる	2001	三重県埋蔵文化財センター
6	荘遺跡発掘調査報告		1980	三重県教育委員会
7	埋蔵文化財試掘調査報告		1992	二見町教育委員会
8	山添遺跡(第2次)・里中遺跡ほか		1997	三重県埋蔵文化財センター
9	離宮院跡(法楽町地区)発掘調査報告		2000	小俣町教育委員会
10	隠岡遺跡発掘調査報告		1987	伊勢市教育委員会
11	近畿自動車道(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ		1991	三重県教育委員会・ 三重県埋蔵文化財センター
12	近畿自動車道(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ		1992	三重県教育委員会・ 三重県埋蔵文化財センター
13	有滝道遺跡		2001	三重県埋蔵文化財センター
14	野篠里中遺跡発掘調査報告		2002	三重県埋蔵文化財センター
15	波瀬B遺跡発掘調査報告		1992	三重県埋蔵文化財センター
16	近畿自動車道(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査報告 －第3分冊－	楠ノ木遺跡	1991	三重県教育委員会・ 三重県埋蔵文化財センター
17	近畿自動車道(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査報告 －第2分冊－	泉貢窯跡・山神城跡	1992	三重県教育委員会・ 三重県埋蔵文化財センター
18	田丸城跡大手門橋発掘調査報告		1986	玉城町教育委員会
19	麻加江城発掘調査報告		1981	度会町遺跡調査会
20	埋蔵文化財発掘調査報告 －第1分冊－	平成元年度農業基盤整備事業地域	1990	三重県教育委員会・ 三重県埋蔵文化財センター
21	発シA遺跡	宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ	2002	三重県埋蔵文化財センター
22	埋蔵文化財発掘調査報告 －第2分冊－	昭和63年度農業基盤整備事業地域	1989	三重県教育委員会
23	史跡斎宮跡	斎宮小学校内発掘調査報告	1985	明和町教育委員会
24	史跡斎宮跡	昭和59年度現状変更緊急発掘調査報告	1985	明和町・ 三重県斎宮跡調査事務所
25	史跡斎宮跡	平成14年度現状変更緊急発掘調査報告	2004	明和町
26	東前遺跡発掘調査報告		2004	三重県埋蔵文化財センター
27	河田古墳群発掘調査報告Ⅰ		1974	多気町教育委員会
28	明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡	一般国道42号松坂・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ	1995	三重県埋蔵文化財センター
29	埋蔵文化財発掘調査報告 －第1分冊－	昭和63年度農業基盤整備事業地域	1989	三重県教育委員会
30	粥見井尻遺跡発掘調査報告	附編 粥見小林遺跡発掘調査報告	1997	三重県埋蔵文化財センター
31	川島遺跡(第2次)ほか発掘調査報告	川島遺跡・東久保北浦遺跡・魚見下起遺跡	2004	三重県埋蔵文化財センター
32	川島遺跡群(第1次)発掘調査報告	奥垣内(Ⅰ～Ⅳ)地区・道場(Ⅰ・Ⅱ)地区・ 塩角(Ⅰ～Ⅲ)地区・東久保東浦(Ⅰ・Ⅱ)地区	2002	三重県埋蔵文化財センター
33	櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ	池ノ端地区・かん志ゆう地区	1997	三重県埋蔵文化財センター
34	櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ	奥ノ垣内地区	1997	三重県埋蔵文化財センター
35	埋蔵文化財発掘調査報告書	昭和58年農業基盤整備事業地域	1984	三重県教育委員会
36	埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ	昭和61年度農業基盤整備事業地域	1989	三重県教育委員会
37	筋違遺跡発掘調査報告 －第1分冊－		2004	三重県埋蔵文化財センター
38	田村西瀬古遺跡		1999	三重県埋蔵文化財センター
39	南遺跡発掘調査報告書		2000	三重県埋蔵文化財センター
40	多気北畠氏遺跡発掘調査概報 小田地区第2・3次調査・世古地区第1次調査・ 六田地区第1次調査	村道西向院世古横線橋脚建設工事に伴う	2003	三重県美杉村教育委員会
41	多気遺跡群発掘調査報告		1993	三重県埋蔵文化財センター
42	多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ		1996	三重県埋蔵文化財センター
43	森南田遺跡発掘調査報告		2000	三重県埋蔵文化財センター
44	戸木城址発掘調査報告		1979	久居市教育委員会
45	六大B遺跡(A地区)発掘調査報告	一般国道23号中勢道路(9工区)建設事業に伴う	1999	三重県埋蔵文化財センター
46	松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告	一般国道23号中勢道路(9工区)道路建設事業に伴う	1993	三重県埋蔵文化財センター
47	嶋抜Ⅱ		2000	三重県埋蔵文化財センター
48	安濃津		1997	三重県埋蔵文化財センター
49	里前遺跡発掘調査報告	一般国道23号中勢道路(10工区)建設事業に伴う	2002	三重県埋蔵文化財センター
50	上津部田城址(第2次)発掘調査報告		1992	津市教育委員会
51	安養院跡発掘調査報告		1990	津市教育委員会
52	山添遺跡発掘調査報告書		2000	安濃町教育委員会・ 安濃町遺跡調査会
53	埋蔵文化財発掘調査報告 －第1分冊－	平成3年度農業基盤整備事業地域	1992	三重県教育委員会・ 三重県埋蔵文化財センター
54	伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか		1990	三重県埋蔵文化財センター
55	伊勢亀山城跡発掘調査報告書Ⅲ		1999	亀山市教育委員会
56	糀屋垣内遺跡		1994	三重県埋蔵文化財センター・ 亀山市教育委員会
57	東樺野2号墳・東樺野遺跡発掘調査報告	国道306号線道路改良事業に伴う	1992	三重県埋蔵文化財センター
58	市場遺跡発掘調査報告		2003	三重県埋蔵文化財センター
59	伊坂城跡発掘調査報告	近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神) 愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う	2003	三重県埋蔵文化財センター

第65表　参考文献一覧表（1）

文献No.	報告書名	副題	発行年	発行機関
60	四日市代官所跡		2000	四日市市教育委員会
61	桑部城跡第2次発掘調査報告書		1997	桑名市教育委員会
62	桑部城跡第4次発掘調査報告書		1998	桑名市教育委員会
63	南小山廃寺発掘調査報告		1986	多度町教育委員会
64	名張藤堂家邸跡		1993	名張遺跡調査会
65	上野城跡(2次)発掘調査報告	崇廣堂武場跡・武家屋敷跡	2000	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
66	国史跡旧崇廣堂発掘調査報告		1994	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
67	国史跡旧崇廣堂(4～7次)発掘調査報告	国史跡旧崇廣堂保存整備事業に伴う発掘調査の記録	2000	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
68	上野城下町遺跡発掘調査報告	野崎神平下屋敷跡	1999	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
69	上野市埋蔵文化財年報9		2003	上野市教育委員会
70	上野市埋蔵文化財年報10		2004	上野市教育委員会
71	法華堂西館発掘調査報告		2002	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
72	埋蔵文化財発掘調査報告	昭和54年度県営圃場整備事業地域	1980	三重県教育委員会
73	蓮花寺跡推定地遺跡発掘調査報告		1997	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
74	比土遺跡発掘調査報告		1997	上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
75	和田遺跡発掘調査報告		1986	上野市教育委員会
76	下郡遺跡発掘調査報告		1986	三重県教育委員会
77	埋蔵文化財発掘調査報告　－第3分冊－	平成2年度農業基盤整備事業地域	1991	三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
78	菊永氏城跡発掘調査報告		1987	阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会
79	恒岡氏城跡発掘調査報告		1981	三重県教育委員会
80	多度町史　資料編1		2002	多度町
81	中世土器研究第70号	伊藤裕偉　1993「中世伊勢・志摩・東紀伊における内耳鍋資料	1981	三重県教育委員会

第66表　参考文献一覧表（2）

げられる。これについては先に文献から指摘した志摩地域の物資販売先として尾張方面を志向していたことと調和的である。この特徴は内耳鍋の分布に既に見られ、中世以来の特質であることがわかる⑦。このほかに、志摩地域では南伊勢系炮烙と中伊勢地域に分布する瓦質炮烙も少量分布する。尾張方面への志向のみならず、伊勢湾沿岸各所との交流もうかがえると言えよう。また、今回大阪湾岸に分布する畿内系炮烙が出土したことにより、廻船の記録に見られる伊勢湾周辺と大阪を初めとした畿内を繋ぐルートが考古学的にも垣間見えてきたといえる。

以上炮烙の分布からは、志摩地域が伊勢湾西岸地域を対象とした近距離の交流、尾張など中距離の交流、そして近畿など遠距離の交流が結節する地域であり、海上交通を媒体とした生業基盤を有していたことを窺わせる。今回の集成は定性データであり、組成率を元にした定量データを分析することで今後更に詳細な検討が可能になると思われる。感覚的な発言が許されるならば、志摩地域における他地域産炮烙の出土状況は1遺跡あたり数点程度と非常に散発的であり、商品として大量の炮烙が一定の供給地から恒常的に供給されていたというよりも、交流先で個別に購入していたような感がある。これは当地域が大規模消費地を近辺に控えた物資の荷揚げ・集荷・出荷を行う集散地としての機能を有していた地域ではなく、寄港地のような中間的位置にあったことを窺わせる。畿内系炮烙に見られるように大規模流通網への関与はあったものの、雇われ船頭のような間接的関与であったのでないだろうか。志摩地域の炮烙の背景には文献や後述する海難者の記録に見られるような広域にまたがる大量・大規模なモノの動きがあるものと思われる。

5　海難者と無縁仏の供養について

今回の総合調査では、海難者供養にまつわる事例についても、文献調査や金石文調査、また民俗調査を通して多角的な視点から分析することができた。これら海難者の供養に関連する近世に建立された海難者供養碑は、文書調査の章で紹介したものの他にも、鳥羽市菅島町の墓地入り口の「喜平治の墓」(寛政8年（1796)、越後国出雲崎の人）および「庄作船海難者の墓」(安政5年（1858)、摂津国八部郡袖戸の人)、志摩市大王町波切所在の大慈寺前「辰力丸遭難者碑」(天保6年(1835))が確認されている⑧。